

1 学校教育目標 たくましく生きる力と豊かな心を持つ生徒の育成

総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする

2 学校経営ビジョン (目指す学校像) 「探求」「礼儀」「忍耐」を基盤にした学校	
(目指す生徒像) 1 考えて行動する生徒 2 礼儀正しい生徒 3 健康な生徒	(目指す教師像) 1 情熱あふれる教師 2 研修に励む教師 3 健康な教師

このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む。絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
1 基礎学力の定着を図る教育を推進する。 2 豊かな感性を育む心の教育を推進する。 3 生徒理解に徹した生徒指導を推進する。	<成果> ・学校運営及び教育活動では、前年度より更に高い評価結果であった。このことは教職員の自覚と努力と責任と協力の賜物であったように思う。 <課題> ・学力向上の推進、特に学習訓練の充実、学習環境の更なる改善 ・豊かな感性をはくむ教育の推進、特に小中連携及びSCを中心とした校内体制づくり ・健康体づくりの推進、特に食育の計画的実施

絞り込んだ重点目標の成果や課題を具体的に評価するためには、どのような項目や指標を盛り込むべきかを考える

5 総括表						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	評価及びその理由	具体的方策	成果と課題
学校運営	学校経営方針	学校教育目標、目指す学校像、目指す生徒像、本年度の重点目標の周知	教職員、生徒、保護者、地域への周知を図る。周知率80%以上にする。	A 周知率は、教職員90%、保護者80%、生徒90%であり目標を達成した。	・「目指す生徒像」や「目指す教師像」の表現を簡易にすることで誰にでも覚えやすく、わかりやすいように工夫する。 ・職員会議、全校集会で説明する。 ・学校便り、保護者会、HP、掲示物等で機会あるごとに知らせ、周知徹底を図る。	学校の経営目標やビジョンについては、職員と生徒及び保護者にも十分周知できていると考えられる。今後はさらに町・地域にも周知できるよう学校だよりやホームページを中心に地域全体に配付できるよう工夫していきたい。
	教職員の資質向上	教職員の資質の向上	教職員の資質の向上を図る。特に校内研究の充実を図り、力量を高める。	A 校内研修計画に基づいて研究授業を行い、研鑽を行った。ICT教育を見据え講師を招聘した研修会を実施した。職員のセンター研への意識も昨年度より10%近く高まった。小中合同研修が企画できた。	・校内研究の取り組みの工夫をする。 ・教育センター研修や研究発表校参観等様々な研修の機会を紹介し、職員が進んで研修に励む雰囲気作りを勧める。 ・研修の重要性を把握し、自己研鑽のために自主的に受講させる。 ・小中合同の職員の研修会を持つ。	校内研では、昨年と同様「個々の能力を伸ばす指導方法の工夫」という主題で、特に基礎基本の定着・確かな学力の向上に重点を置いて取り組んだ。生徒の実態分析から、改善案を計画し、学校、家庭、個々の教師でどうあるべきかを考え取り組んだ。研究授業者は3名が行なった。また、教育センターから講師を招いてのICT活用の研修を深めることができた。職員の教育センター短期研修率は100%であった。
	危機管理体制の整備	危機管理体制の整備	危機管理マニュアルをもとに、職員の危機意識を高める。また、訓練を通し生徒の危機意識を高める。	B 危機管理マニュアルの活用は職員は89%がプラス評価であった。生徒の87%、保護者の77%がプラス評価である。避難訓練の実施は年2回であったが、新型インフルエンザの関係で2回目の実施が訓練という形ではできなかった。安全点検簿の提出状況が良くなかった。	・本年度県の企画経営部より提示された安全管理の手引きを参考に本校の実態に応じた危機管理マニュアルを作成する。 ・年2回以上の防災・避難等訓練を実施する。 ・学級活動、全校集会等機会あるごとに生徒に対する安全指導を行う。 ・安全点検を定期的(月1回)、随時実施し、不備な箇所等があれば早期に改善する。	本校の実態に即した危機管理マニュアルの作成ができた。また、防災・避難訓練は2回実施し、うち1回は不審者対応の訓練を行う予定であったが、新型インフルエンザの関係で訓練という形には十分にはできなかった。今年度のように生徒を取り巻く様々な環境の変化に新しい要素が加わることを考えるならばやはり毎年危機管理マニュアルの見直しは必要である。安全点検に関しては、特に設備・機材や備品等に不備が少なかったためか、点検していても提出を忘れる職員が多かった。もう少し呼びかけを行う必要があるし、点検簿を手軽に記入し即提出できる方法も考えたい。
教育活動	学力向上	個に応じた指導・わかる授業に向けた指導方法の工夫改善 家庭学習の定着	県の学習状況調査等において、前年度平均を上回る。課題の与え方の工夫。	A 職員は少しでも学力が上がるよう指導法を工夫している。生徒の65%、保護者の78%が授業にその効果があると考えている。1・2年生とも前年と比較し、平均の県との差が縮まっている。	・学習に取り組む雰囲気づくりを高めるため学習規律を定着させる。 ・校内研究と関連させ全員参加のテーマを持った授業研究会を行う。 ・教科における基礎的・基本的な内容を明確にするとともに生徒の実態にあった学習指導のあり方を工夫する。	各教科、各学年担任がそれぞれの教科・学級で学習規律を定着させるためのさまざまな工夫に取り組んだ。また、あいさつや宿題の提出などは全体で徹底して取り組んだ。授業研究もテーマを持った研究を全員で取り組むことができた。ただ、教科の進度・準備や期日などの関係から1年生ばかりに偏った部分は今後改善していきたい。
	心の教育	道徳の時間の充実 読書の充実 ボランティア活動の充実	学校公開や授業参観等で積極的に道徳授業を公開する。朝読書の充実、ボランティア活動の充実を推進する。	B 授業参観日に全学級で道徳授業を公開した。また、町の教育研究会でも1回の公開授業研究会を実施した。ただ、生徒の75%、保護者の76%が心の教育の実践にプラス評価であったが昨年より10%ほど低くなった。	・道徳の授業では特に自他の生命尊重や人間としての生き方を考えることを中心にすすめる。 ・生徒会活動、特にそのボランティア活動を通して人に対する思いやりの心と奉心を育む。 ・自ら計画したことを確実に実行し、その結果が他にいい影響を与えることを知ることで自尊心の高揚を図る。	各学年ともふれあい道徳などの参観授業においては「自他の生命尊重」と「人間の生き方」を中心に授業を進めることができた。また、町の教育研究会では公開授業研究会も実施できた。学校全体、特に生徒会を中心としたボランティア活動でこれまでの活動実績から協力校として知事表彰を受けることができた。ただ、道徳の授業やこれらの活動が心の教育として保護者や生徒に十分に届いていない点アンケートの結果から気になる。

	健康・体力づくり	「生きる力」を育むための、体育・食育の推進	知育・徳育・体育・食育のバランスのとれた人間を目指して指導を行う。自主的な体力作りの推進。自己健康管理が出来るようにする。	A	職員の意識は健康面の配慮100%、組織的な健康づくり77%ができていますと答えている。食育に対する意識も100%でかなり高まった。	給食指導を行うことから食事のマナーや食べ物を大切に する心情を育て、牛乳残しや残菜をなくす。 ・保健だよりや集会等を通し、「早寝・早起き・朝ごはん」の大切さを伝える。 ・部活動を推進し、健康推進をはじめ、人格形成や人間関係の構築等も視野に入れて指導を行う。また、それに伴い体位・体力の向上を図り、欠席者の減少を図る。	部活動にはほとんど全員参加できている。顧問も熱心に指導している。欠席・遅刻も後半に入りずいぶん改善できた。また、食育に関しても今年度はかなり計画通りに進めることができた。
	生徒指導	生徒指導の充実	生徒指導についての共通理解、共通実践をする。記録を残し次年度に活かす。基本的生活習慣の定着を図る。	A	職員の89%が問題行動やいじめ等に対応できていると答えている。また、実際問題行動も起きていない。問題行動に対する適切な行動もできていると考えている。	・生徒一人一人の特性に応じた声かけ等を行い、生徒との信頼関係を深める。(レポートの形成) ・毎月の生徒指導協議会で情報交換を行い、その都度対策を協議する。 ・職員一同が共通意識のもと共通理解・共通実践で取り組む。 ・遅刻を無くし、大きなあいさつができるような朝の当番指導を実施する。	どの職員も生徒に声をかけるように努めた。また、朝のあいさつ運動に校長、教頭、生徒指導担当を中心に参加し、あいさつと服装身なりの指導を継続して行った。また、生徒指導協議会ばかりでなく必要に応じて職員を招集し協議を行った。小中連携は本年度はその必要性を確認したが実際に近くの小学校と連携し研修を実施できたのは1度だけだった。
		教育相談の充実	個に応じた指導を心がけ、不登校生徒数が発生しないよう努力する。	A	定期的な教育相談はもとより、折にふれ様々な先生方が教育相談に関わった。特に本年度はSCの先生のかかわりが深まった。不登校生徒は発生しなかった。	・教育相談のアンケート等の結果を活用しながら、定期教育相談を充実させ、特に対話を重視し実践する。 ・定期的に教育相談部会を設定し、常に生徒の状態を全職員が把握できるようにする。 ・SCの積極的な活用を図る。	観察やアンケートを利用し、定期的な教育相談・チャンス教育相談を行ってきたが、今年度はSCの先生自ら積極的に動いていただき研修や相談活動が充実した。
	生徒会活動	生徒会活動の充実	全校生徒が学校への所属感を持ち、主体的に生徒会活動に取り組む。	B	ボランティア活動については生徒会を中心にかなり充実した活動ができたが主体的な部分では先生方の関わりが中心で不十分であった。	・組織の充実を図り、計画的に実践的な取り組みを図る。 ・縦割グループでの活動を広め、実践力をつける。 ・毎月のアルミ缶回収活動や牛乳パック回収活動をさらに全校の活動になるよう工夫し行う。	生徒会を中心に各専門部ごとにボランティア活動を意識した内容の活動を行っている。今年は、従来の空き缶回収や牛乳パック回収に加え、ペットボトルの蓋の回収も行った。ただ、生徒会・生徒自身の活動としての自主性ではもっと積極的であってほしい。
特定課題	特別支援教育	特別支援教育体制の確立	校内委員会を設置し、支援を要する生徒全員について情報交換を行い支援計画を作成する。	B	対象生徒の支援に関する情報交換会を実施したり、支援計画の作成を実施したが、全職員での研修が1回しかできなかった。	・教育支援計画に基づき、必要に応じ関係機関と連携し、学校全体で支援を行う。	特別支援教育体制の確立という点では学校全体で取り組む体制はかなり出来上がったが、細かい部分ではまだまだ改善する部分が多い。特に関係機関との連携は本年度まったくその必要性がなかったため全く進まなかった。
	中1英・数の学習環境の改善充実(少人数指導・TT指導)	数学・英語で全学年の少人数、TT学習実施とその充実	数学・英語においては学習状況調査などで前年度より平均点をあげる。	B	前年度に比べ1年生は数学・国語の一部の観点を除き概ね達成できたが、国語の関心・意欲・態度及び数学2の見方考え方がかなり低かった。 2年生は、国語の読む力や英語の理解・表現の力が県よりもかなり低いポイントであったが、他の観点は概ね県平均を上回った。	基本的な学習習慣を身につけさせ、個に応じた指導方法の工夫に努める。 習熟度別少人数学習やT・T指導を行う。 アンダーアチーバー等の生徒については、個別支援を放課後及び長期休業等を利用して行う。	今年度ばかりでなく昨年度よりは基本的な学習習慣を身につけさせるため放課後や夏休みや冬休みなどの個に応じた指導も行ってきた。数学においては習熟度別少人数学習を英語ではT・T指導を実施し学習の定着を図ってきた。その成果は少なからず県の学習状況テストなどに反映されてはきている。ただ、どうしてもこれまでの基礎・基本の習得部分が低かったり、家庭学習の部分が弱く、まだ満足な結果を出すことができていない。

評価結果を踏まえて、「何ができて、何ができなかったのか」を考える
特に、C、D評価はもとより、A、B評価も、「評価項目として適切だったのか」は吟味の余地がある

6 総合評価	<p>学校の現状、生徒や地域の実態、昨年度の課題等を考えた場合、今年度の評価項目は適正だったと考えるし、評価もAが6項目、Bが4項目と、おおむね達成できたと思う。生徒や保護者、教職員の学校評価アンケート、学校関係者評価でも、今年度の取り組みは概ねよい評価だった。</p> <p>それぞれの項目を細かく見ると、学校全体(または組織)としても少し連携・協力が必要だったり、教職員や生徒の意欲や保護者の意識などを高められなかったりした部分もあり、次年度以降の課題でもある。ただ、心の教育推進では全体評価は昨年同様ではあったが公開授業を行い研究会を実施するなど積極的な方向へと広がりを見せたり、生徒理解に徹した生徒指導推進や食育推進は顕著な向上がみられた。反面、特定課題に関しては昨年度から変化が大きく表れていない部分「B」評価であり、今後も取り組みの工夫が必要である。</p> <p>今年度の本校の重点項目である「基礎学力の定着を図る教育推進」「豊かな感性を育む心の教育推進」「生徒理解に徹した生徒指導推進」については、それぞれの項目ごとに取り組みを充実させてきたが、「基礎学力の定着を図る教育推進」の部分が結果としてなかなか表れてこない点を何とかしていきたいと考える。ただ、いずれにしろ三つの項目は関連があり、研究主任、生徒指導主事・教育相談担当、道徳主任を中心としてさらなる連携・協働を図ることができれば、自ずと効果が上がってくるものとも思う。</p>
--------	---

「できなかった」点について、次年度以降の具体策を検討する
「できなかった」こと自体よりも、改善策を見出せるかが重要である

7 来年度の改善策	<p>「基礎学力の定着」を図るために、校内研究の内容に、読解力や表現力を取り入れた指導方法の工夫を取り入れるとともに、保護者への学習習慣の改善の呼び掛けを進めていきたい。</p> <p>危機管理に関する職員の意識を高める必要性を感じる。現状として問題行動もなく、不登校生徒もいないということで職員全体になかなか危機的な雰囲気が出てこない。良危機発生の対応はもちろんであるが危機予防の観点からの研修も積み上げる必要がある。</p> <p>生徒会活動の充実はもちろん自主的な活動ができるよう指導体制を充実してい。</p> <p>来年度は、小中連携の視点で各学校での取り組みを連動させる必要がある。「基礎学力定着のための学習習慣」「仲間や友人を思いやる心の育成」など小中連携を進めることでこれまでかなりの部分手詰まりであった課題も取り組むことが可能になってくるであろう。地域の行事や活動へのボランティア参加、2日間の職業体験学習を含むキャリア教育の実施、地域諸団体や関連団体等の学校への支援・協力をお願いなども、小中連携でより可能なものになっていくと考える。小中の教職員が校種の枠を超え、ともに研修に努め、協力体制の確立することで地域の理解も生まれていくものとも考える。</p>
-----------	--

は共通評価項目、 は独自評価項目